

天竜市船明(ふなぎら)地区にみられる石造物について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-07-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 老川, 寿太郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00025615

ふなざら
天竜市船明地区にみられる石造物について

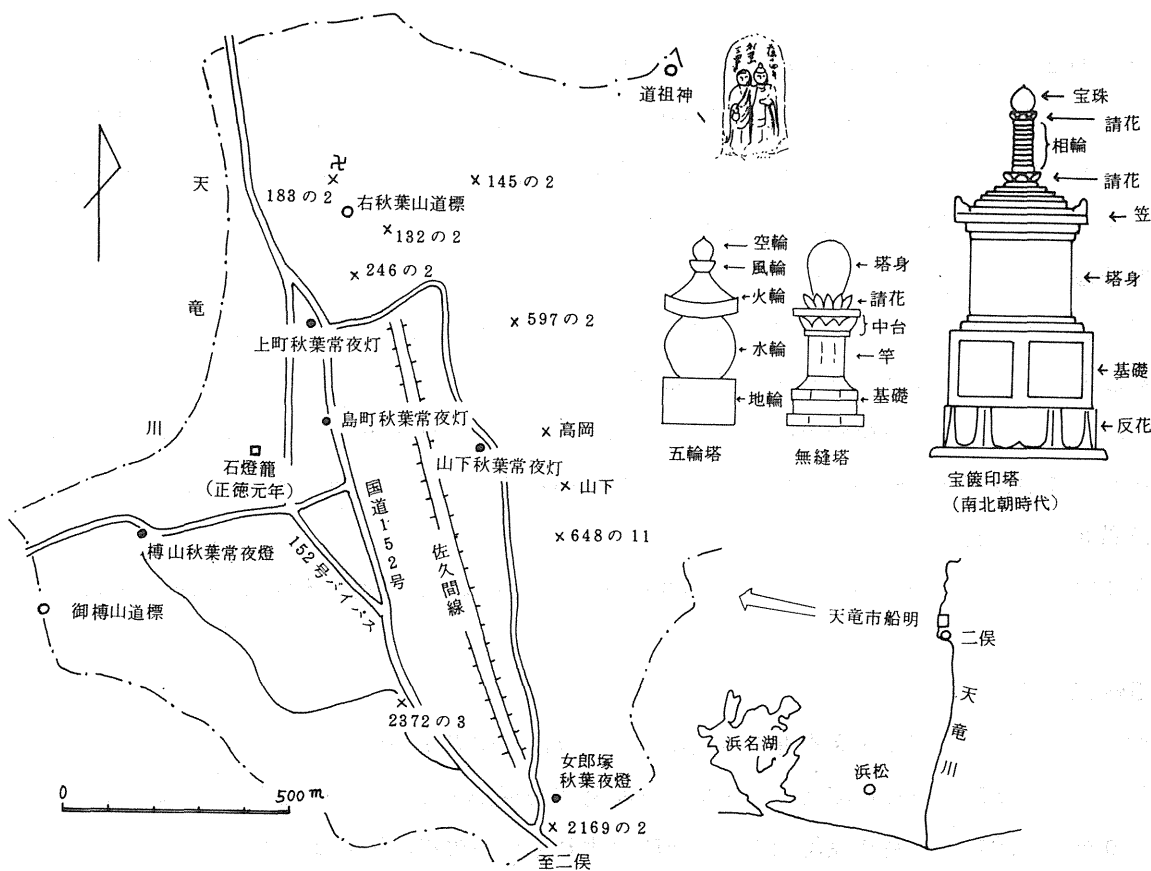
老川 寿太郎*

天竜市船明地区には600年来の石造物が数多く残っていて、それらの形態、石工技術や原料の岩質から作られた年代を推定することができ、船明史の研究に役立つ。

船明地区にある石造物のなかで、南北朝時代のものに角礫凝灰岩、室町時代のものに花こう岩が使用されているが、この原岩は他の地方から運搬されたものと思われる。寛永元年(1624年)に始めてこの地で石造物の原料としての泥岩の採掘が開始され、つづいて礫岩、貝殻石灰岩(元禄元年、1688年)、輝緑凝灰石、結晶片岩などが採掘され、これらを原料とする石造物が多くなった。それ以降、交通が便利になるとともに再び他の地方から運ばれた花こう岩等が石造物の中心となった。

泥岩は時期によっては風化が甚しく、これを原料にした石造物には欠損したものが多い。

寛永(1624年)から元禄(1703年)の頃までは、彫刻技術が勝れ、泥岩を除いて岩質も良いから、石造物の破損程度は比較的軽い。また、この期間は同一系統の岩石が用いられており、石造物の型は、寛永型、寛文型、元禄型等に分れている。石工は専門の外来者(長野県高遠から静岡県内に入っていた)によったものとみられる。



天竜市船明地区略図

* 副会長(天竜市)

宝永（1704年）～寛政（1800年）年間の石造物は技術が平凡であり、享和（1801年）以降になると石工技術、岩質共に比較にならないほど低下している。

以下のⅠ～Ⅷは船明地区において確認できる石造物の岩質その他を列記（明治以降は除く）したものであるが、現在、他の地域の石造物との関連等について比較検討中である。

Ⅰ 宝きょう印塔

南北朝時代 宝珠・塔身欠損、大型、角礫凝灰岩（船明132の2番地）

室町時代 宝珠・相輪・塔身欠損、中型2基、花こう岩（船明132の2番地）

南北朝時代 相輪の外欠損、中型、かこう岩（船明2619の2番地）

室町時代 相輪の外欠損、中型、かこう岩（船明高岡）

Ⅱ 五輪塔19基

室町時代 完全欠損なし、中型、かこう岩（船明山下）

” 一石五輪欠損多し、小型、泥岩6基、かこう岩6基、（船明132の2）

” 一石五輪完全、中型、泥岩（船明145の2）

” 一石五輪欠損多し、小型、かこう岩（246の2）泥岩（597の2、648の11、188の2に各一基）

江戸時代 一石五輪完全、中型、泥岩（132の2）

Ⅲ 石碑89基（彫刻技術：寛永は直線的、素朴雄大。正保～元禄は曲線的、柔和女性的。宝永以降は平凡）

寛永（1624）薄身大型、泥岩6基、正保（1646）薄身大型、泥岩6基、延宝（1673）薄身小型泥岩8基、元禄（1688）薄身小型、貝殻石灰石及泥岩21基、宝永（1704）厚身中小型泥岩3基、正徳（1710）中小型泥岩2基、享保（1716）厚身大型泥岩6基、この他延享（1744）～天保（1830）までのものが合せて37基あり、岩質はすべて泥岩である。

Ⅳ 無縫塔（むほうとう）19基

竿付2基、竿無16基いずれも泥岩（船明183の2） 竿無し1基泥岩（2372の3）

Ⅴ 記念塔8基（船明183の2にあって全部泥岩）

江戸時代 竿・中台・請花の上に地藏尊、80、85、90、100cm各1基、六地藏彫刻250cm1基、竿・中台上に地藏尊90cm1基、長方形、経を彫刻85cm1基、西国行脚記念60cm1基。

Ⅵ 道標3基（泥岩）

天保14年（1843）道祖神、（是より秋葉山3里半）1基、右秋葉山光明山、御樽山道の2基年号欠損。

Ⅶ 石燈籠6基

正徳元年（1711）150cm奉寄進石燈籠の銘、完全、安山岩1基

寛政元年（1789）秋葉夜燈女郎塚欠損、秋葉常夜燈樽山欠損、同島町改築。いずれも泥岩3基

” 9年（1797）秋葉常夜燈山下、同上町いずれも火袋欠損、泥岩2基

Ⅷ 器物3点（泥岩）

室町時代の輪廻車、径25cm、江戸時代の香鉢75cm、文化8年（1811）手洗鉢90cm各1基。